

独立行政法人 森林総合研究所創立100周年記念シンポジウム ー未来に求められる森の恵み 夢研究への提言ー

プログラム (13:30 ~ 16:30)

開会挨拶 森林総合研究所理事長 大熊 幹章

森林研究者の夢 ーこれからの科学技術の方向性ー

佐々木恵彦 (日本大学総合科学研究所 教授)

日本の知恵をとりもどそう ー森林研究の今後を考えるー

柏原 精一 (朝日新聞総合研究本部 主任研究員)

「木づかいのススメ」から望む夢

川井 秀一 (京都大学生存圏研究所 所長)

休憩 (アンケートの回収にご協力ください)

森林総研研究者の持つ夢

田中 憲蔵 (森林総合研究所 海外研究領域研究員)

松村ゆかり (森林総合研究所 加工技術研究領域研究員)

夢に向かって ー研究所のこれからー

閉会

日時: 平成17年10月19日(水) 13:30 ~ 16:30 (受付は13時~)

場所: **イイノホール** (東京都千代田区内幸町2-1-1 飯野ビル7F TEL: 03-3506-3251)

交通: 千代田線「霞ヶ関」(イイノホール出入口C4直結)

日比谷線「霞ヶ関」(千代田線「霞ヶ関」イイノホール出入口地下通路連絡)

丸の内線「霞ヶ関」(イイノホール方面出入口B2徒歩2分、日比谷線ホームを経て千代田線「霞ヶ関」C4)

銀座線「虎の門」(新橋方面1番・9番出入口徒歩3分)

三田線「内幸町」(イイノホール方面A7出入口徒歩3分)

JR線「新橋」(日比谷口より徒歩10分)

入場無料および事前の参加お申込は不要です

お問合せ先

独立行政法人 森林総合研究所

企画調整部 研究情報科 広報係

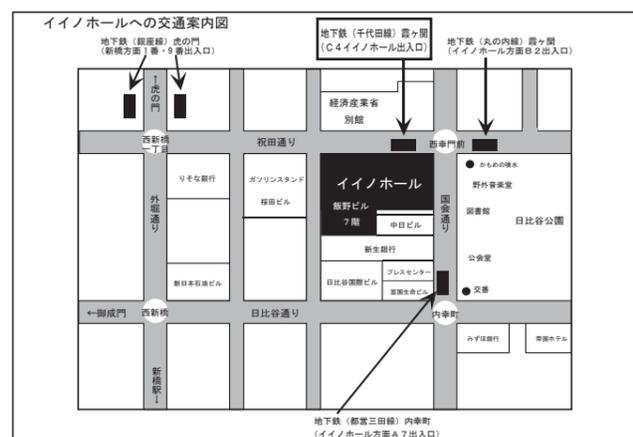
〒305-8687 茨城県つくば市松の里1番地

TEL: 029-873-3211 (内線227)

FAX: 029-873-0844

E-Mail: kouho@ffpri.affrc.go.jp

URL: <http://www.affrc.go.jp/>



独立行政法人 森林総合研究所 創立100周年記念シンポジウム

未来に求められる森の恵み

夢研究への提言

平成17年10月19日(水)

13時30分 ~ 16時30分 (受付13時~)

会場: **イイノホール** (東京都千代田区内幸町2丁目1番1号 飯野ビル7F TEL:03-3506-3251)
(最寄駅 地下鉄千代田線・日比谷線・丸の内線「霞ヶ関」・銀座線「虎ノ門」・三田線「内幸町」・JR「新橋」)

ご挨拶

独立行政法人 森林総合研究所
理事長 大熊 幹章

森林総合研究所は、本年、創立100周年を迎えます。そこで毎年行っている所員による研究成果発表会を衣替えし、「未来に求められる森の恵み 夢研究への提言」と題する創立100周年記念シンポジウムを計画しました。このシンポジウムでは、外部からお招きした3名の先生方と当研究所の若い2人の研究者から、30年～50年先の森林・林業・木材研究のあるべき姿についてそれぞれの視点から描かれる夢が語られます。どのような夢が語られるか大変楽しみです。それはまさに我々の分野のこれからの進むべき道を示唆するものであり、襟を正して拝聴させていただくとともに研究所の将来に生かしていきたいと思っております。

シンポジウムのご案内

森林研究者の夢 — これからの科学技術の方向性 —

佐々木 恵彦 (日本大学総合科学研究所 教授)

近代科学の創始者達は神には祝福されない人々と言われ、それ故に仲間を集め、学会を作り、興味のある事象を研究し、科学を発展させた。科学は20世紀の前半に、大きく発展したが、強力な機械力の発達とエネルギーの大量消費が付随した。機械とエネルギーを利用することによって、人類は現代の恐竜として地球上に君臨し、大きな戦争をも引き起こした。20世紀後半には、人口増加と貧困、環境破壊、資源の枯渇などの問題を抱え、持続的な社会への変換が求められている。いま、科学者は、未知のことを知りたいという興味よりも、人類の付託に答え、役立つ研究を求められている。森林は無秩序な利用によって、急速に減少・劣化している。森林を守り、破壊された森林を回復する研究は森林研究者にとっては、付託に答えることであり、また、森林が生産する木材やその他の有機物を利用する研究は持続的な社会を構成するための大きな力である。森林研究者への期待は大きい。

「木づかいのススメ」から望む夢

川井 秀一 (京大大学生存圏研究所 所長)

2050年の私たちの生活や社会および自然環境は、どのようになっているだろうか。発展途上国の人口爆発は不可避であり、経済発展が進み、環境の劣化と資源の枯渇が進む。異常気象、自然災害の頻発などの不測の事態に備え、資源・エネルギー・食料の自律性と持続性が求められる。安全・安心な自然環境と社会環境の保持が重要となるからである。そのために、化石エネルギーから太陽エネルギーに依存する社会への転換が不可欠である。わが国の場合、自然環境の保全には国土の2/3を占める森林が重要な役割を担い、社会環境には人口減少と高齢化への対処が重要である。日本木材学会は昨年「日本の森を育てる木づかい円卓会議」を主催し、提言書「木づかいのススメ」を取りまとめた。現在、「国産材を使い、日本の森を育てる、木づかい運動」を展開している。本講演では、国産材利用の立場から2050年の未来シナリオを想定し、木質資源の理想循環系の構築に向けた研究課題を提起する。森林・木材に関する環境-生産-利用の「持続性」実現に向けて、学際的・融合的な総合研究領域の開拓が必要であり、多様な領域の研究者や技術者の連携が何より大切であることを強調したい。

日本の知恵をとりもどそう — 森林研究の今後を考える —

柏原 精一 (朝日新聞総合研究本部 主任研究員)

日本の森の美しさは、幕末から明治にかけて来日した多くの外国人を感嘆させている。薪炭、肥料、用材、牧草の供給源となる一方で、恒久的に半自然として維持される里山のシステムを、かつて取材する機会があった植物生態学の大御所は「盆栽と並ぶ日本人の偉大な発明だ」と絶賛していた。

木材利用の面でも、各樹種の特性を活かした適材適所主義は、すでに弥生時代にその萌芽が認められる。「100年育った木を伐るのなら、100年使える物をつくれ」。持続可能な資源利用のあり方を、これほど簡潔かつ明確に表現した言葉は、世界中どこを探しても見あたらない。

しかし、こうした日本が誇る独自の森林文化は、この100年ほどの間にすっかり忘れられた。森はどこも荒廃の一途をたどっている。どうしたらかつての美林を蘇らせることができるのか。

森林総研研究者の持つ夢

田中 憲蔵 (森林総合研究所 海外研究領域 研究員)
松村ゆかり (森林総合研究所 加工技術研究領域 研究員)

森林総合研究所創立100周年を迎え、100年間の研究足跡をかえりみると、想像もしていなかったような地球環境の変化とともに、以前は夢と思われていたような技術が実現していることに、あらためて気づかされます。しかし夢と思われる技術の実現も誰かがその実現を目指して歩んだ結果にはほかなりません。当研究所では本シンポジウム開催を機会に、全研究員から各自の抱く研究上の夢を募集しました。寄せられたものには、比較的可能性が高いと思われる夢から、次世代に引き継がれるだろう夢、さらに奇想天外な夢まで様々な夢がありました。そこで、当研究所で最も若い研究者が、これらの夢を確認し、選りすぐってみました。当研究所の研究員が潜在的な意識の中で志向している夢を皆様に御披露いたします。

夢に向かって — 研究所のこれから —